

## 論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

中津 智子

主論文の題目  
および  
掲載誌・審査委員

題目 Urgent Computed Tomography for Determining the Optimal Timing of Colonoscopy in Patients with Acute Lower Gastrointestinal Bleeding（下部消化管出血における内視鏡の適応および施行時期の検討）

掲載誌: Internal Medicine 2015;54:553-558

主査 北川 博昭  
副査 月川 賢  
副査 宮川 国久

[論文の要旨・価値]

血便を主訴に受診時、下部消化管内視鏡前の CT 検査の有用性を検討した。[対象]2004 年 9 月から 2012 年 12 月までに血便を主訴に受診した 1604 例を対象とし CT 診断、内視鏡診断について検討した。CT 診断は、憩室から腸管内へ造影剤の血管外漏出像を認める場合や憩室周囲に明らかな高吸収域像を認める場合を憩室出血、左側結腸の連続した壁肥厚やハウストラ消失を虚血性腸炎とした。内視鏡診断は、憩室からの活動性出血や憩室内に露出血管を認めた場合を憩室出血確診例、出血源を指摘できない場合を憩室出血疑診例とした。本研究は聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会(承認 2632 号)の承認を得た。[結果]1604 例のうち CT 検査を施行したのは 879 例(55%)であった(造影 CT 検査 638 例、単純 CT 検査 241 例)。CT 検査を施行し原因疾患は憩室出血が 423 例と最も多く、CT 診断と内視鏡診断の一致率を検討した。待機的な内視鏡を行った 239 例中、200 例で事前に CT 検査で初期診断を行った。うち 141 例で CT 診断と内視鏡診断が一致し (71%)、原因疾患は虚血性腸炎が最も多かった。一方、緊急内視鏡施行例では、557 例で事前に CT 検査をおこない、479 例で内視鏡診断と一致し (86%)、原因疾患は憩室出血であった。憩室出血における造影 CT 検査の有用性について検討した。造影 CT 検査を施行した 638 例のうち、造影剤の血管外漏出像を 104 例で認め、71 例(68%)に責任憩室の同定が可能であった。さらに、66 例(93%)では、CT 診断と内視鏡診断で出血部位が一致した。また、内視鏡での責任憩室同定率は、造影剤の血管外漏出像を認めた群は認めなかった群と比較して有意に高率であった(68% vs. 20%、 $P<0.001$ )。[結論]以上から、血便で来院した際には、バイタルサインが安定していれば可能な限り造影 CT 検査を施行し、緊急内視鏡の必要性を判断することが重要であると考えられる。

[審査概要] 審査は主査、副査および数名の陪席者のもとにおこなわれた。申請者による 20 分弱のプレゼンテーションはわかりやすく要点をよくまとめていた。約 30 分の質疑応答ではこの膨大なデータをどのようにまとめたか、CT を施行した群としない群をどのようにわけたか、再出血の定義は何か、複数回の CT をした人はいないか、出血シンチなどは用いないか等臨床的に多くの疑問があったが今回は retrospective なデータ解析であり解答には限界もあったが、中津君はおおむね適切な解答をしていた。また、今後の研究の方向性などについても述べた。乙申請で、研修医終了から 5 年での学位申請で短時間に膨大な臨床研究は大変良くまとめられていた。

## 最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 研究内容の発表と質疑応答を通して、申請者は臨床研究への取り組み、専門的知識、研究意欲などについて問題がないものと判断した。また、英語能力は引用文献を読んで和訳したが、発音、読解力、共に国際会議で通用すると判断した。発表態度は真摯であり、今後の臨床研究方針、治療への応用など良く考えており、学位授与に値すると評価した。